

**京都大学教育研究振興財団助成事業  
成 果 報 告 書**

平成30年 4月26日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会 長 辻 井 昭 雄 様

所 属 部 局 文学研究科

職 名 准教授

氏 名 杉 山 卓 史

助 成 の 種 類	<b>平成29年度 ・ 研究活動推進助成</b>			
申請時の科研費 研究 課 題 名	感性論としての自己触発論			
上記以外で助成金 を 充 当 し た 研 究 内 容				
助成金充当に関 わる共同研究者	(所属・職名・氏名)			
発表学会文献等	(この研究成果を発表した学会・文献等) 第68回美学会全国大会			
成 果 の 概 要	<b>研究内容・研究成果・今後の見通しなどについて、簡略に、A4版・和文で作成し、添付して下さい。(タイトルは「成果の概要／報告者名」)</b>			
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	1,000,000 円		
	使用した助成金額	1,000,000 円		
	返納すべき助成金額	0 円		
	助成金の使途内訳	費 目	金 額	
		物 品 費	508,925	
		旅 費	491,075	
当財団の助成につ いて	<p>(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。)</p> <p>科研費が不採択となり困惑していたため、大変ありがたい助成でした。おかげさまで今年(2018年)度は科研費(基盤(C))採択にこぎつけることができました。ありがとうございました。</p>			

本研究は、近年進展しつつある美学(aesthetics)の「感性論的転回」——「感性(αἴσθησις)」という語源に基づく「感性(的認識)の学」としての自己規定——の潮流に、「自己触発」という観点から貢献しようとするものである。この着想は、近代美学の出発点であるカント(Immanuel Kant, 1724-1804)の『判断力批判』(1790年)冒頭の〈感性的判断は表象を(悟性によって客観に関係づける認識判断とは異なり)構想力によって主観とその快および不快の感情に関係づけるものであり、そこでは主観が表象によって触発されるように自分自身を感じている〉という一段に由来する。科研費の申請に際しては「自己触発」のみに焦点を当てたが、報告者が第68回美学会全国大会(2017年10月、於・國學院大学)において「芸術と感情」と題するシンポジウムでの提題を求められたことから、本研究では、「自己触発」と「感情」との関係を、主として文献研究によって考察した。上記シンポジウムでは、「美的判断における自己触発—「心の哲学」から見たカントの感情論—」と題して、以下のような報告を行った。これは、本研究の成果の中核をなすものである。

- 1980年代以降、カントの「心の哲学」の研究が活況を呈している。それは、『純粋理性批判』(1781年)の「演繹論」や「誤謬推理」章において展開される「自我」ないし「自己意識」論を、現代の「心の哲学」の研究成果を参照しながら「超越論的心理学」として再構成するものであり、その結果として提示された心のモデルは、それだけをとっても十分に魅力的であり、しかも、予想以上に現代認知科学のフレームワークとの親和性の高いものだった。しかし、その実り豊かな成果は、前述の「自我」ないし「自己意識」論までにとどまり、「感情」にまでは及んでいない。この間隙を埋める必要がある。
- そのために、「感情」と「自己触発」との関係に注目する。『純粋理性批判』「演繹論」における「自己触発」は、「自己意識」という近年の「心の哲学」的研究が注目してきた事態を成立させる上で中心的な役割を担っているが、翻って『判断力批判』では、「表象によって触発される」と「自分自身を感じる」とことが並行的に語られる。このことは、「自分自身を感じる」という「感情」の零次元は「もう一つの」自己触発論と捉えうる、ということの意味する。それゆえ、美的判断における「自分自身を感じる」という事態は「本家」自己触発とどう異なるのか、それは「感情」研究にとって何を意味するのか、が問われねばならない。
- この問いに答えるべく、『判断力批判』「第一序論」第Ⅷ節と本論「総注」に注目する。前者においては、悟性(のみ)が内官を触発して客観規定を生む認識判断に対し、美的判断においては相互に促進ないし阻害する構想力と悟性が、また、そうした対等な関係としての反省的判断力が、心の状態を触発して快ないし不快の感情を生む、という相違が説明される。後者においては、「生命感情を触発」することによって生まれる快および不快の感情が「身体的」であるという、感情の身体性を重視・強調する現代の「心の哲学」を先取りするような主張が展開される。
- しかし、カントが最終的に目指すのは、そうした「身体的」感情論ではなく、快の感情が他者といかに共有されうるか、という問題の解明であった。ここに潜んでいるのは、美的判断の分析に経験科学(ここでは心理学)は必要ではあるが十分ではなく、経験科学の成果を超越論的視点から取りまとめる必要がある、という(方法論的)認識である。これは一見、認知科学の成果を援用する今日の「心の哲学」とは折り合いが悪いように思われるかもしれないが、自己意識をめぐる問題においてはむしろ逆で、この超越論的方法論こそが、現代の認知科学のタスクアナリシスの原型として評価されている。だとすれば、同様の評価がカントの感情論に対しても与えられるべきである。

なお、シンポジウムでは他に現代美術・音楽・写真の研究者からの提題があったが、各提題後に有意義な議論を交わすことができた要因として、共にドイツで開催された国際芸術展であるドクメンタとミュンスター彫刻プロジェクトを本助成金により事前に調査・視察できたことを、挙げておきたい。

さらに、以下のような基礎的資料を作成できたのも、本研究の成果と言える。

- 近現代の「感情」を扱った主要な哲学的テキストにおける「感情」に相当する語の訳語対照表（英・独・仏・日）。それによって明らかになったのは、英語で言えば”feeling”、”emotion”、”affect”、”passion”といった語が「感情」「情動」「情緒」「情念」などのさまざまな語に訳されており（独・仏語においても同様）、しかも、緩やかな対応関係は見られても決して一義的なものではない、という混乱した状況であった。
- カントにおける「触発する」という動詞の用例分布。アカデミー版カント全集既刊分から497例を採取し、各用例の主語と目的語（何が何を触発するのか）を逐一確認した結果、再帰表現以外にも主語と目的語が内容上同一である用例がきわめて多く、カントにおける自己触発論の重要性を定量的に認識した。とりわけ、『遺稿』における用例が全体の半数近くの用例を占めていることは、同稿の自己触発論を批判期の公刊著作のそれと比較しつつ明らかにするという課題が待ち構えていることを意味するであろう。